



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

古田先生を偲んで（紙碑）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川澄, 正幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00179957

古田先生を偲んで

川澄 正幸



谷中七福神巡検で説明をする古田先生
東京都台東区長安寺（壽老人）前にて
2019年3月31日・天野宏司撮影

2016年2月の退職記念祝賀会からまだ5年半。あまりにも早い訃報に、呆然とするしかありませんでした。天野宏司氏（学部41期・院28期）からご連絡いただき、2022年9月11日夕刻、若かりし頃のお写真などもたくさん飾られた式場にて執り行われたお通夜で、急遽、弔辞を読ませていただきました。学生時代に、たぶん「みつや」で一杯やりながら、「中藤さんが古田さんの退職記念会の実行委員長をやり、川澄は葬儀委員長をやる」とワイワイやった記憶があります。その時古田先生は「バカ！ 葬儀

委員長っていうのは残された遺族の面倒もみることだぞ！」と言われたことを思い出します。突然のお別れではありましたが、通夜でお話をさせていただけたことで一奥様やお嬢様方の面倒を見ることはいささか無理ですが、古田先生との“約束”は少しは果たせたのかな、と勝手に思っています。

通夜の儀の読経の後に、ご住職から「故人にちなんで」というお話がありました。私が弔辞の冒頭で「校門を出たら先生も学生もないと教わりましたので、今日は“古田先生”ではなく“古田さん”と呼ばせてください」と申し上げたことをご住職は取りあげられ、「故人のお人柄は師匠が弟子を教え・教えられるという仏教の教えそのもの…」という内容のお話をされました。弔辞で古田先生お得意のフレーズ、「コウモンでたら〇ン〇」なんて紹介せずによかったな、と思った次第です。

さてこの度、紙碑執筆の依頼を東京学芸大学地理学会よりいただきました。故人の学術業績などは私にはとても書けないし（これは天野君に譲ります）、古田先生との思い出は「古田悦造先生退職記念特集」¹⁾に書いたしなあと思いつつ、その「退職記念特集」を手に取り、古田先生執筆の論説「身近な地域調査と風景印の教材化―国分寺市域を事例として―」²⁾を再読しました。

国分寺市域の郵便局の風景印の地理教育への活用の可能性に言及する本論説において古田先生は、「たとえば、第七小学校の学区域には、

本多郵便局と本町郵便局が位置している。本多郵便局の風景印のデザインは、祥応寺（学区域内）境内のヒノキ科の常緑樹である『このてかしわ』（市指定文化財）とその碑となっている³⁾と具体的に紹介され、「このような風景印は、まさにその地区の地域性を反映した景観としてみなすことができ、『地域調査』を考える上で地理的事象を取り上げる際に、極めて有効な教材として活用し得るものである⁴⁾」と記されている。

このような古田先生の指摘の通り、「地域の人の生活」に関連する見学や調査の対象として、小学校では「郵便局」を活用してきているであろう。ただし今後もこの「郵便局」が子どもたちにとって「身近な施設」であり続けられるかはよくわからない。私が現在勤務する高校では、「年賀状は書いたことがない」という生徒が少なからずいる。寂しい限りだが、これも時代の趨勢というやつかもしれない。また、近年教育界はデジタル化が進み、小学校でもコンピュータ端末を活用した「調べ学習」が盛んに行われている。小学生が「地域の郵便局の風景印」を検索し、その由来などを調べることもなどは容易なことかもしれない（教員の多忙化ゆえに、子どもたちを校外に連れていく余裕がないということもある）。そのような状況ではあるものの、“地理学徒”のプライドだけは保ち続けたいなどと考える私などは、なんとかして子どもたちをフィールドに引っ張り出したくなるわけである。

というわけで、前置きが長くなりましたが、「よし、このフィールドを歩いて、故人を弔うか」と思いつき、出かけたのでした。

2022年11月12日土曜日。午前中勤務だった私は午後、JR国分寺駅へ。駅そのものと駅前の変貌ぶりに1980年代の残像が脳裏にこびりついている私は、クラクラしつつも市の観光

案内所へ。ここで国分寺市教育委員会編集の「こくぶんじウォーキングマップ」を入手した。市内の史跡・名所がもれなく掲載され、さらに国分寺崖線も開析谷も描かれている。

この地図を手に駅北口から10分ほど商店街を歩き、坂道を下ると国分寺市立第七小学校前に到着する。気温20℃、今秋一番の巡検日和。早くも汗ばんできた。土曜の午後ゆえか、校内は子どもたちも教職員の姿もない。帰宅後に同小学校のブログ⁵⁾を拝見すると、野川とその源流となっている湧水の学習や武蔵国分寺跡や国分寺崖線などの学習も行っている。「この学校で風景印をどのように教材として…」と考えつつ、5分ほど歩いて国分寺本多郵便局前へ。そしてこの局の目の前が祥応寺である。

寺の境内の記念碑には、同寺は享保年間に開発された本多新田の菩提所として、親村の国分寺村の無住の本寺（現在の国分寺市西元町）が移されたのが始まりと記されている。コノテガシワ（児の手柏）も同時に移植されたとのこと。国分寺本多郵便局の風景印にはこの境内のコノテガシワと児の手柏の石碑が描かれている。

子どもたちとまず国分寺本多郵便局を見学し、風景印を入手。そののち境内を探索した子どもたちは「あった！」と歓声を上げるに違いない。こういうちょっとした実体験や発見を少しずつでも継続させたいものである。さらに発展させて、上級生での武蔵野の新田開拓や玉川上水の開発にかかわる学習につなげていくのもいいかなあ、などと考えつつ、私は隣接の本多公民館・図書館に足を向けた。

図書館の入り口近くのコーナーには玉川上水に関する書籍が並べられており、たましん地域文化財団の書籍も数冊あった。編集者の坂田宏之氏（学部40期）のお名前を確認し、思わずにんまり（古田先生と坂田氏のエピソードは

「退職記念特集」⁶⁾を読まれたし)。さらに館内の「地理・地誌」コーナーに向う。多摩地域・武蔵野の歴史・文化と自然に関する書籍が並ぶ棚には『歴史地理調査ハンドブック』⁷⁾が、これは本当に嬉しかった。

さらに当日、本多公民館では「玉川上水と国分寺市内の分水」と題された市教育委員会などが主催する講演の真っ最中。事前予約制のため、残念ながら拝聴できませんでしたが、これも古田先生のお導きかとも感じた次第です。ともあれ、こうした公共施設・教育機関が学校のすぐ目の前にある第七小学校の子どもたちは恵まれていると感じた次第である（なお近くには民俗資料室もあるが、ここも事前予約が必要のため、私は見学できなかった）。

ところで祥応寺に話を戻すが、同寺の境内は大変良く整備されており、小学生が大勢で見学に訪れるとちょっとどうかな？と感じるほどに静寂をたたえていた。これに対して隣の本多八幡神社の境内では、子どもたちがワイワイと土曜の午後を楽しんでいた。そこで図書館を出た私は、10人くらいの小学生たちが遊ぶ本多八幡神社に向かった。

入口付近の案内板には、同神社は本多新田の開発時に、祥応寺の和尚と村人が協力して山城国男山八幡神社を勧請したと記されている。毎年9月の第2土曜・日曜には盆踊りが行なわれ、神輿は市重要有形民俗文化財に指定されているとのこと。

そして境内には縦48cm、横40cm、高さ34cm程度の砂岩の「力石」が安置されている。石の表面には「奉納三拾貫目」「文久二戌八月十五日」「當所願主藤野栄治郎」と刻字されている。文久2年とあるので1862年のことである。新田開拓当初から村の若者たちが境内に集まり、30貫目（約100kg）の力石を持ち上げる催しで大いに盛り上がったに違いない。境内を

日常的に遊び場にしている小学生たちは、もしかしたらこちらに興味を持ち、新たな国分寺本多郵便局の風景印の図案を考案するかもと想像した。古田先生曰く「図画工作の教科と連動」⁸⁾という学習だ。

さてこの地を2時間ほど探訪した私は、次に連雀通り（学大正門を出たところにある大通り）を北西に歩き、国分寺東恋ヶ窪四郵便局前へと向かった。この郵便局の風景印には武蔵国分寺跡地と薪能が描かれている。しかし私は「JA 東京むさし」の看板とその手前のいかにも“武蔵野”の風情たっぷりの畑地に目を奪われてしまい、この局の前をうっかり通り越してしまった。局自体もマンションの1階部分の半分で、残り半分の飲み屋の方が目立つ外観。たぶん小学生でも2、3人も入れればいっぱい広さで、授業での見学は無理かなあと考えつつ、さらに国分寺市と小平市の境界に位置している小平上水本町郵便局へ。こちらの風景印の図案はケヤキの葉に小平市立ふれあい下水館だ。

このあたりでかなり日が傾いてきたが、紅葉の木々に彩られた玉川上水のほとりを多くの市民とともに散策。私はその後、一橋学園駅から西武多摩湖線に乗車して国分寺駅へ。車中で「このまま帰るのみなあ」と思い立ち（嘘です。最初から予定していました）、JR 武蔵小金井駅へ。駅北口の今はなき「みつや」のあたりを徘徊してから、古田先生を偲んで一杯傾けたのは言うまでもない。先生が絶対食べないだろう串カツを食べつつも、最後は日本酒で締めた。

そこでチビリチビリやりつつ、「退職記念特集」をめくり、とりわけ私よりも後の世代のみなさんの「古田悦造先生の思い出」を読んだ。あらためて現在各界にて活躍中であろう方々の瑞々しい文章から、「教育者・古田先生」の姿も見えてくるようであった。私は若い方々のように「古田先生にはお世話になり」と素直に

お礼を言ったことはなかったかもしれない。しかし今、古田先生の残された研究の跡をたどり、こんな良い一日を楽しませていただくことができた。このことに感謝し、そして次はさらに多摩の広い地域や九十九里、そして佃島あたりをブラブラしようかとも考えつつ帰路に着いた。

わが師・古田悦造先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

(学部34期・院20期)

注

- 1) 東京学芸大学地理学会編 (2016):『学芸地理』古田悦造先生退職記念特集:古田悦造先生を送る, 71, 140p.
- 2) 古田悦造 (2016):身近な地域調査と風景印の教材化:国分寺市域を事例として, 学芸地理, 71, pp.29-38.
- 3) 前掲 注2), p.35.
- 4) 前掲 注2), p.35.
- 5) <http://nanasyou.blogspot.com/> (2022年11月15日閲覧)
- 6) 前掲 注1), p.18.
- 7) 有蘭正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編 (2001):『歴史地理調査ハンドブック』, 古今書院, 249p.
- 8) 前掲 注2), p.35.



退職記念祝賀会の一コマ

2016年2月27日撮影

早世された一番弟子の中藤淳先輩(学部33期・院19期)は写真にて参加されている